

思想の言葉で読む 21世紀論

もう10年も前になるが、21世紀がどんな時代になるかを世界の思想家に聞いて回ったことがある。いま振り返って実に鋭い予見だったと思うのが米国の社会学者ウォーラー・ステイン教授の言葉だ。

ニューヨーク州の北。森に囲まれた州立大学の構内で、燃える紅葉を背に教授は言い切った。「500年続いた近代文明の仕組みは、大きな崩壊に向かっている。これから人々は長く困難な時代を迎えようとしているのです」
当時は、情報技術の急速な進化に世間の関心が集まっていた。地球はひとつに結ばれて壁や境界のない世界が実現する。そんなバラ色の未来図も盛んに語られていた。
それだけに「これから半世紀近くの間、人類は厳しい混乱と不安の時代に直面する」という断言には、少し悲観的すぎるのではないかと感じた

アポリア

「ことを覚えている。」

新しい世紀が幕を開けていくに、ニューヨークの摩天楼の一角が崩壊する映像と一緒に楽天的な未来図も崩れ去った。その後の世界は予告されたとおり「困難な時代」に向かっているように見える。

ウォーラー・ステイン氏は最

思考を放棄して袋小路に

近の著書では、世界の危機はさらに深刻化して、これからは「激しい揺れ」や「激しい暴力」がいたるところで発生するだろうと警告している

（『入門・世界システム分析』藤原書店）
地球の文明は行き詰まり、本当に出口も見えなくなってしまうのだろうか。

『思考のトポス 現代哲学

のアポリアから』（新耀社）などの著書がある哲学者の中

山元氏は、現代文明は深刻なアポリア（袋小路、難関）に入り込んだと見る。

グローバル化が進めば進むほど、狭くなった地球上での富の格差は広がるばかりだ。科学は核のように環境を後戻りできない形に変えてしまいうれをもつ技術を生み出し、一

要な知なのを見極めることが必要になっている」

しかし、もっと根本的な問題は、現代のアポリアに立ち向かうべき人間の姿そのものが、大きく揺らいでいることではないかと考える識者もいる。

「人間を全体として考える

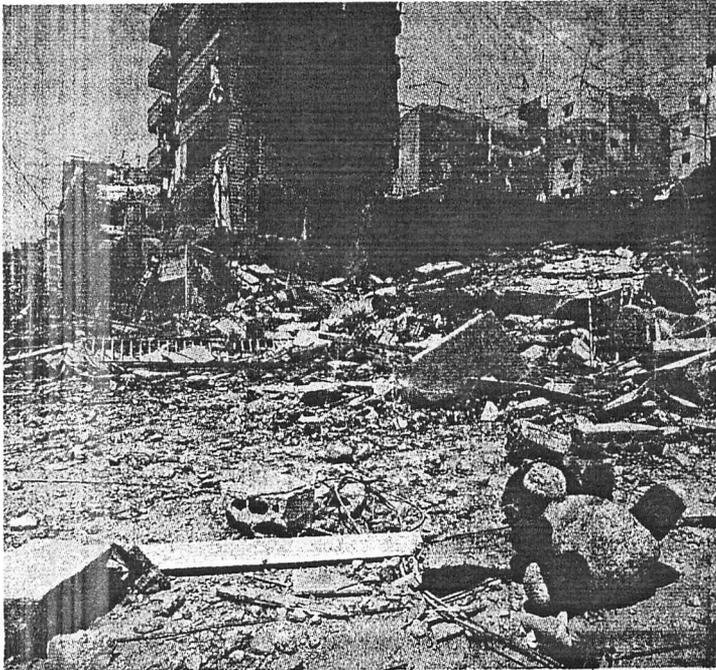
うさを感じるという。

「個人が脳を鍛えれば何か問題が解決する」というのは幻想。人間を部材ごとで考えていては、いつまでも袋小路からは抜け出せない。生きる喜びをもつ本来の人間を取り戻すためには、立ち止まって全体を振り返ることが大切はずだ」

ギリシャ神話にはライオンの頭とヤギの胴体とヘビの尾をもつ怪獣が登場する。「キマイラ」と呼ばれる。

脳は機械によって鍛えられ、心は専門家の手で管理される。そして目や耳は別々の情報端末につながれている。バラバラな部分が組み合わされたような現代人の姿は、不気味な伝説の怪獣を連想させる。

過去の人間とは違う姿をした人類が脳や心を互いに結び合わせて怪獣のような力を持つのか。あるいはキマイラのような姿を制御できなくなって、さらに袋小路の奥底に迷い込んでいくのか。
分かれ道は目の前に近づいているのかもしれない。
（編集委員・清水克雄）
◇次回は来週掲載します。



アポリアの風景＝2006年7月、レバノン・バイルートで、大野明撮影